NTT東日本

TALK SESSION

アニュアルレポート　座談会2026

K25-03968【2601-2701】

INTRODUCTION
はじめに

本誌は『地域循環型ミライ研究所アニュアルレポート 2026』の
別冊番外編です。

本編では伝えきれなかった、
調査研究活動の過程で感じた手応えや迷い、
地元の方との深い交流や、文化、食、自然など地域の魅力に触れる喜びを、
座談会形式でお届けします。

ぜひ、ページをめくりながら
私たちの想いとリアルな声を感じて、
地域と関わるきっかけにしていただければ幸いです。

NTT東日本株式会社
地域循環型ミライ研究所

CONTENTS
目次

ローカルループの実現に向けた3つの視点
～人とICTを起点とした新たな価値創造～

THEME 01 地域とのつながり方・新しいコミュニティのつくり方

NTT東日本 地域循環型ミライ研究所
宇野 咲耶子　水谷 考嬉　本間 愛佳

ファシリテーター
国際大学グローバル・コミュニケーション・センター
伊藤 将人氏

P3

THEME 02 地域の魅力を起点とした「地域への想い」の育み方

NTT東日本 地域循環型ミライ研究所
中山 雄太　田中 健人　原田 拓哉

ファシリテーター
Slow Innovation 株式会社代表取締役／金沢工業大学 虎ノ門大学院 教授
野村 恭彦氏

P7

THEME 03 持続化に向けた共創の仕組みづくり

NTT東日本 地域循環型ミライ研究所
阿部 寛之　高山 麻由美　谷口 翔太郎

ファシリテーター
武蔵大学社会学部 メディア社会学科 教授／武蔵学園データサイエンス研究所 副所長
庄司 昌彦氏

P11

地域とのつながり方・新しいコミュニティのつくり方

NTT東日本
地域循環型ミライ研究所
チーフエバンジェリスト
宇野 咲耶子

NTT東日本
地域循環型ミライ研究所
エバンジェリスト
水谷 考嬉

NTT東日本
地域循環型ミライ研究所
エバンジェリスト
本間 愛佳

ファシリテーター

国際大学グローバル・コミュニケーション・センター
伊藤 将人氏

長期的な視点で信頼関係を築く

伊藤　地域循環型ミライ研究所（以下、ミライ研）の地域連携プロジェクトも、今年度はさまざまな実証実験を経て多くの収穫がありました。これまでの活動を振り返りつつ、それぞれの視点から感じたことや今後の展望についてお話を伺えればと思います。

本間　2024年度から継続している新潟県十日町市にある棚田を活用した企業研修実証の調査結果をもとに政策提言をはじめとする情報発信を進めています。農林水産省との連携も強化していて、農山漁村と都市部の企業との関わりについての検討会へも参加しました。他にもドルトン東京学園と連携した探究学習の取り組みや横須賀市走水地域の「海とミライのがっこう」というプロジェクトにも参画しています。

どのプロジェクトにも共通することですが、調査研究に協力していただくにあたって、「関係者すべてがwin-winになれるか」を意識しています。大切にしているのが「いかに信頼関係を構築するか」ということです。そのために何度も足を運んでその地域の理解を深めるようにしています。実証などでは関係が一過性になってしまいがちですので、地域に溶け込むために真摯な姿勢や丁寧なコミュニケーションを心掛けています。みずから積極的に関係人口となることで“自分ごと”としてその地域のことを考えられるようになってきました。

関わった地域は第二の故郷

水谷　私は秋田県でワデュケーションの実証実験を行いました。取り組みの過程や成果を共有する機会にも恵まれ、伊藤さんと連携して学会に参加させていただき、研究内容を深掘りすることができました。秋田県とは継続して連携していて、この取り組みのモデルが予算化され、地域で事業化を進めるという展開になっています。

地域との関わり方は多様であり、単純な成果指標で測ることはできないと感じています。関係人口の増加という数字は一つの指標ですが、そこに込められた質的な変化、つまり地域の方々との信頼関係や絆の深まりは、数値だけでは見えにくいものです。だからこそ、継続的にコミュニケーションを取るようにしています。さらに協力していただいた恩を返したいと常に考えていて、関わった地域のことを第二の故郷のように思っています。

私たちがやるべきことは、得られた経験やデータをしっかり煮詰めてその地域はもちろん、他の地域へも還元していくことだと考えています。

宇野　皆さんが言っているように「信頼」はとても大切なことだと感じています。よく地域の方に「あなたは何をしに来たの?」と問われます。地域の方々は悪気があって聞いているのではなく、純粋に「この人は何をしに来たのだろう」という疑問からなのですが、そう問われると緊張してしまいます。「地域のために」というのはおこがましいと思いますし、そうは言いたくないのです。

私にできることは活動の目的を明確にして伝えることだと思っています。ただ、一方的に目的を果たすのではなく、「一緒に地域のことを考えてみませんか」というニュアンスも含めるのも忘れません。

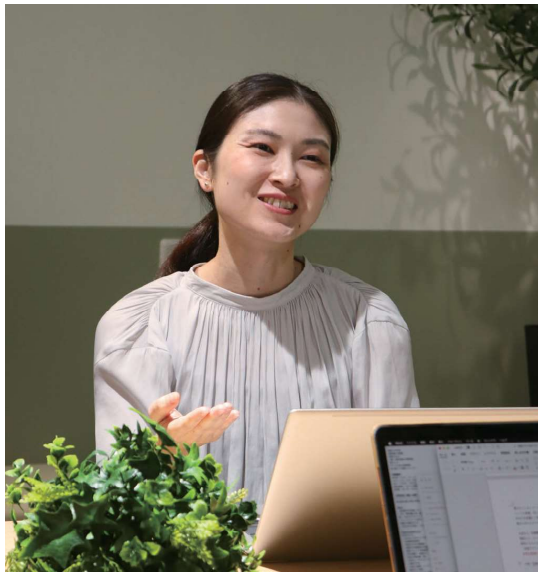
フィールドと理論の橋渡し

伊藤　確かに、地域との信頼関係は時間をかけて育てるもので、すぐに成果を求めがちな現代社会において、ミライ研のアプローチは長期的視点を大切にしているのが特徴的だと思います。

ミライ研は、フィールドと理論の橋渡しをしているとも言えます。その役割は今後ますます重要になるでしょう。水谷さんのようにアカデミックな経験は「研究所」という名称があるからこそできることだと思います。ただ、私たちのような大学の研究者と同じことをしていくのとは異なる、企業ならではの視点も必要になってくると思います。

企業間の業務提携でもない、対顧客でもない新しい関係性の構築が鍵になってくるのかもしれません。そうした関係構築にはやはり「信頼の獲得」は不可欠ですね。

本間　地域の資源はたくさんありますが、探究学習に関わる調査・研究の中で「人」に勝るものはないと結論付けました。人は重要なコンテンツとなり得るので、人そのもののウェルビーイングが探究学習によってどう変化していくかを調査する。それを文部科学省の方針や地域のニーズとすり合わせて、どのように地域での経済活動や事業と結び付けていけるのか、その可能性も含めて探究していきたいと考えています。



潜在的な課題を顕在化するとは

水谷　自治体も毎年のように政治的・制度的な方針の転換がある中で、ノウハウの蓄積が課題になっていると思われます。そこで外部のリソースを頼らざるを得ない場面も多いでしょう。ただ、自治体側では地域の潜在的な課題に気付けていないケースも見受けられるので、私たちが敬意を示しつつ、時に無邪気にコミュニティに入り込むことで課題を顕在化させることもできるのではないかと思っています。そうして最終的には地域が自走できるようになると社会的にも経済的にもインパクトは大きいと考えています。

宇野　私たちの活動も段階が進んできて、社会実装を視野に入れるところに来ていると思います。外部の目線によって潜在的な課題が顕在化することこそ、私たちの存在意義につながってくるのではないか。こういった活動では、お互いを尊重して能動も受動も許容されないといけないと思っています。そういう居心地のいい環境を整備することが持続性にもつながりますし、特別な時間になるのではないでしょうか。

こうしたことが関係人口を生み出すかもしれないと仮説を立てています。先日伺った地域ではとてもいい時間が過ごせて、帰ってからもFacebookに友達申請が来るなど、関係の継続を感じているところです。

地域の声を横断的に活かしていくこと

伊藤　地域にとってミライ研は、当たり前だったことに対して価値や新しい気付きを生む存在になりつつありますね。参加者が必ずしも最初から主体的とは限らない中で、そうした人たちに寄り添い、ゆるやかに参加を促す「背中を押す仕組み」の重要性も見えてきました。

今後の課題としては地域の皆さんの多様な声をもっと丁寧に拾い上げ、特定のプロジェクトや実証に閉じ込めず、横断的に活かしていく仕組みづくりも必要ですね。

水谷　その通りですね。たとえば、現場で生まれる小さな気付きやアイデアを、ミライ研の内部だけで完結させるのではなく、地域の行政や他の団体とも連携して共有し、社会や地域の中に循環させることが重要だと感じます。

本間　都市部と地域をそれぞれ別のものとして対比するのではなく、お互いに価値を生み出すきっかけとして関係人口がうまく機能するといいと思っています。その上で外からの視点が何かのきっかけになれるといいですね。人の内発的動機で芽生えた意識を育んで維持していくことや、人の関心と地域そのものや活動をどうマッチングさせていくかが今後の課題だと考えています。

宇野　それと、ミライ研の強みは「柔軟性」だと思います。地域ごとに異なる課題や文化に寄り添いながら、多様な形で連携を深められる。だからこそ、固定観念にとらわれず、新しい挑戦を続けていけると思います。

伊藤　皆さんの意見をしっかり受け止め、ミライ研の進化につなげていきたいと思います。

本日はありがとうございました。

PROFILE

ファシリテーター

国際大学グローバル・コミュニケーション・センター

伊藤 将人氏

社会学者。長野県出身。一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程修了。日本学術振興会特別研究員を経て現職。専門は地域社会学、地域政策学、モビリティーズ研究。地方移住や関係人口、観光など地域を超える人の移動に関する研究や実践・政策立案に携わる。主著に『数字とファクトから読み解く 地方移住プロモーション』(2024 学芸出版社)、『移動と階級』(2025 講談社)、『戦後日本の地方移住政策史』(2025 春風社)など。

地域の魅力を起点とした「地域への想い」の育み方

NTT東日本
地域循環型ミライ研究所
チーフエバンジェリスト
中山 雄太

NTT東日本
地域循環型ミライ研究所
エバンジェリスト
田中 健人

NTT東日本
地域循環型ミライ研究所
エバンジェリスト
原田 拓哉

ファシリテーター

Slow Innovation 株式会社
代表取締役／金沢工業大学
虎ノ門大学院 教授
野村 恭彦氏

地域愛、郷土愛の捉え方とは

野村　今日のテーマは「地域の魅力を起点とした住民協働や地域愛の育み方」です。

そもそも、「地域愛」や「郷土愛」って何なのでしょうか。私は東京・国分寺の出身ですが、駅前は全国どこも似た風景になって、実家ももうありません。正直、郷土愛なんて感じにくいんです。けれど、5年前に京都に移り住むようになって地域の人たちと関わるうちに、「生まれた場所じゃなくても地域への思いは育つのかもしれない」と感じ始めました。

田中　私は神戸で生まれて立川で育ったので、「地元」がどこか分からないんです。育った街の姿が変わっていく中で郷土愛を持つのは難しい。でも、自然豊かな里山とか原風景に触れると、何か懐かしい感情が湧くんです。私にとっての地域愛とは、生まれた場所じゃなくて、人間として自然とつながる原初的な感覚に近いのかもしれません。

原田　私は大阪生まれ、育ったのは福岡の糟屋郡宇美町という所です。大学で関西へ、就職で東京に来ました。自分にとって地元というと福岡ですが、「地域愛」って言われると、何か押しつけられているような息苦しさも感じますね。単純に「好き」という言葉じゃ片付かない感情があります。

中山　私は千葉の郊外育ちです。実家はそのまま残っていますが、特別な思い入れはない。でも今、愛媛の松山に移住して暮らしているうちに、方言や人の温かさに触れて、「あ、少しずつ松山市民になっているな」と感じるようになりました。

地域愛の本質について考える

野村　皆さんの話を聞くと、「地元」って生まれた土地だけじゃなく、暮らしや関わりの中で形づくられていくものなんですね。私は「その地域のためなら経済合理性を超えて動ける力」、それこそが「地域愛」の本質だと思っていますがいかがでしょう。

田中　それ、すごく分かります。プロジェクトで出会った人の顔が浮かぶと、「また会いたいな」「何か力になりたいな」と思う。愛というより「放っておけない」という気持ちに近いです。

原田　新潟県小千谷市でプロジェクトを一緒に進めている方に聞いた話ですが、その方の知り合いが地元に戻った理由について、「地域愛ではなく“怒り”が原動力だった」と語っていたそうです。地域の大切なものが次々と失われていく現状、そしてその状況になるまで手を打てなかった上の世代への怒りが、活動を続けるモチベーションになっていると。地域愛という言葉の響きはきれいだけれど、現実にはそういう複雑な思いも含まれているんですよね。われわれも安直に「地域愛を醸成する」などと言ってはいけないなと、ハッとさせられました。

野村　なるほど。家族愛と言っても、100%好きというだけじゃないですものね。良いところも悪いところも受け入れる感じですね。もしかしたら「愛」という言葉が少し美しすぎるのかもしれません。

中山　佐賀県唐津市で食文化のプロジェクトに関わった時も、当初「地域愛」と言っても皆さんピンとこないようでした。でも郷土料理を地域の外から訪れた人と一緒に作るワークショップを開いたら、それまで当たり前だと思っていた地域特有の料理の価値に気付いて、「地域の食文化を誰かに話したり残したりしたい」と感じる方が増えました。直接「地域愛」と言葉にはしなくても、それがいわゆる地域愛なんだなと感じました。

田中　私も函館で住民インタビューをした時、地元の人たちが自分のストーリーを語る姿を見て、良いことも悪いことも含めて「愛着」が生まれるんだと感じました。

地域への愛着を再認識する ローカルディグ活動

野村　今、偶然に出た「愛着」って、いいキーワードですね。過去とつながっている自分の一部みたいな感覚でしょうか。

中山　そうですね。愛着というのは、自分に結び付いた感覚。何かあったときに気になってしまうような存在です。

野村　私が移住先の京都に感じている「愛」はそれとは少し違っていて、未来への覚悟や責任感、コミットメントに近い。「愛着」は過去、「愛」は未来につながる意志なんでしょうね。

原田　日本人にとって「愛」はちょっと重い言葉ですよね。「愛着」くらいのほうが自然に言える。地域への思いって、結局そこにいる“人”への思いとセットだと思うんです。会いたい人がいる場所だから、心が向かう。

野村　ローカルディグの本来の目的から見ても、外部の人に地域愛を芽生えさせ、地元の人に愛着を再認識させる効果があるようですね。

原田　小千谷で行った“音のワークショップ”では、農作業の音を録音して聞き直したら、「うるさいと思っていたコンバインの音が、実はセミの声や風の音など自然の音と調和しているんだ」と気付いた参加者がいらっしゃって。今回は“音”という切り口でしたが、これまで意識していなかった視点から地域を見ることで、地域の魅力を再発見できるんだなと感じました。

中山　先ほどお話した佐賀でのワークショップで、各参加者が互いの家庭のお雑煮について紹介し合う時間を設けたところ、他の家庭のお雑煮と比べてみて初めて「自分の家庭や地域の味」がそれぞれ独特の個性なんだと気付いた参加者が多くいました。地域を愛することは、その土地に生きる自分を愛することでもあるんですよね。

地域は自分の「役割」を 意識できる場所

野村　では、地域愛って地方だけのものなんでしょうか。東京では育ちにくい？

田中　いや、都会でも地域活動が盛んな場所なら成立すると思います。

原田　でも東京は便利すぎて、「誰かがやらなきゃ」という意識が芽生えにくい。一方、地方は公助が薄い分、自然と共同体意識が生まれやすい気がします。

中山　地域で役割を持って動いている人の姿は、それを見聞きする人々の共感を得やすいですね。やっぱり「自分の役割」を意識して生きている人の話は心に響きます。

野村　もともと人間には「自分が社会の循環の中で役割を果たしている」という実感を求める欲求があるのだと思います。でも地域を守るのは大変で効率も悪い。その“しんどさ”を支えるのが、地域愛なのかもしれません。都市生活で役割を見失った人が、その欠けた部分を埋めに地域へ行く――私はこれを「地域愛による欠損埋め立てモデル」と呼びたいです。

原田　分かります。地域の方とともに行っている自然体験プログラムの運営のため、横須賀へ3年間通い続けていますが、都心では持てなかった“役割”を、心のどこかで求めていたのかもしれません。こうした場づくりがあちこちでできていけば、地域にも役立つし、都会で乾いてしまった人の心を満たすこともできますよね。

田中　わざわざ現地に行かなくても、デジタルを使って失われゆく音や風景を記録・アーカイブして共有する仕組みがあってもいいですよね。ICTで「地域愛」を広めたり深めたりする形も考えられますね。

経験から地域を捉え直す ミライ研の活動

野村　都市に暮らしていて「もう消費したいものがない」と思うほどに満たされるのも贅沢ですが、最良の贅沢は「地域の一部となって役割を持つこと」かもしれません。それが人生の意味をつくってくれる。そんな意味を求めて皆がいろいろ熱心に動くようになれば「地域愛エコノミー」が生まれるのではないでしょうか。

こういう動きが各地に立ち上がってくると、“地方創生”みたいな上から目線の話ではなく、もっとフラットに、ウェルビーイングが高まるのではないかと思います。

「地域愛」をとなえるだけではなく、皆さん一人一人が経験から捉え直すこと自体が、ミライ研らしい活動だと思いますので、これからも経験し、対話し、それを発信し続けてください。

今日はありがとうございました。

PROFILE

Slow Innovation 株式会社代表取締役／金沢工業大学 虎ノ門大学院 教授

野村 恭彦氏

博士（工学）。慶應義塾大学大学院理工学研究科 後期博士課程修了。金沢工業大学虎ノ門大学院 イノベーションマネジメント研究科 教授。京都工芸繊維大学 客員教授。日本ファシリテーション協会 フェロー。国際大学GLOCOM主幹研究員。ACM CSCW国際会議やIEEE国際会議、情報処理学会など論文多数。主著に、『イノベーション・ファシリテーター』『フューチャーセンターをつくろう』『裏方ほどおいしい仕事はない！』（どれもプレジデント社）など。

ファシリテーター

持続化に向けた共創の仕組みづくり

NTT東日本
地域循環型ミライ研究所
チーフエバンジェリスト
阿部 寛之

NTT東日本
地域循環型ミライ研究所
チーフエバンジェリスト
高山 麻由美

NTT東日本
地域循環型ミライ研究所
エバンジェリスト
谷口 翔太郎

ファシリテーター

武蔵大学社会学部
メディア社会学科教授/武蔵学園
データサイエンス研究所 副所長
庄司 昌彦氏

地域共創の取り組みを点から面に

庄司 本日は皆さんの現在の取り組みを伺いながら、「いかにその活動を面的に広げるか」「持続性を持たせるには」といった観点で議論したいと思っています。まずは皆さんの現在の取り組みを教えてください。

阿部 私は今、デジタル技術を使って、消えかかっている「街の記憶」の記録や、「地域の魅力」の可視化に取り組んでいます。デジタルの力で地域固有の風土を可視化することで、住民のシビックプライドや地域愛を醸成するのがねらいです。具体的な取り組みとしては、北海道や新潟で第二次世界大戦時の遺構のVR化や地域の特徴的な音を集めたサウンドマップづくりに取り組んでいます。

谷口 私はミライ研全体のプロジェクトを俯瞰し、施策を検討する役割を担っています。常に考えているのは、私たちが関わらなくなっても活動が持続できる仕組みをつくれないか、という点です。持続性を保つためには、私たちだけでなく仲間づくりが重要だと考えています。そのため、他の企業や地場企業、大学などの教育機関とも連携できる場として、「パレット」というイベントを運営しています。

高山 私はミライ研で情報発信を担当しています。現在、最も力を入れているのは、約3万人いるNTT東日本グループ社員の中で、地域活動に積極的に取り組む方々の活動を社内外に発信することです。

弊社には、業務外で、伝統文化の継承、スポーツ振興、自然保護、高齢者・障がい者支援など、幅広い分野で活躍する社員がいます。こうした社員を「地域エバンジェリスト（以下、地域エバ）」と認定して、その活動を発信・応援することで、社員全体の地域活動への自主的な参画意欲を高めることを目的としています。

点を面にしていく

庄司 それぞれ、取り組みはさまざまですね。それでは、「いかにその活動を面的に広げるか」、つまりは“点”を“面”にしていくことが求められていると思うのですが、皆さんの活動の中で、そういったことをどう意識されていますか？

阿部 今はまだ事例づくりの段階なのですよね。でも、単につくっておしまい、にならずに、住民の皆さんにとって財産になるようなデジタルコンテンツに仕上げたいと思っています。まずは事例を積み重ねることで、地域とデジタルの新しい関係性を世に示していきたいなと考えています。

谷口 「パレット」に関しては、参加企業同士の新しいプロジェクトの芽吹きもあり、少しずつ理想の形に近づいてきています。もう一つ、南魚沼では学生の地域参加を促進する活動を展開しています。PoliPoliGovという仕組みを活用して若者の声をライトに集めながら、地域を盛り上げていく試みです。すぐに移住や定住には至らないまでも、関係人口としての裾野は広がっているのではないかと感じています。

高山 地域エバへのインタビューを通じて、地域活動をしていることで会社に引け目を感じている社員もいることが分かりました。改めて「会社が応援している」と明示的に伝えるだけでも、地域エバ社員のやる気が高まり、取り巻く職場・同僚も応援したいという気持ちが醸成されると感じています。制度として体制を整えることが気運の醸成につながり、活動を面として広げていくことにつながっていると感じています。

庄司 またまたそれぞれ異なる視点で面白いですね。取り組みを持続させる、という観点での課題感もそれぞれお話しください。

阿部　デジタル化という行為が、その地域の文化をアーカイブとして後世に残すことにつながるので、文化の継承という観点では大きな意義があると考えています。ただし、取り組みとしては地味な活動ですし、現在はわれわれが主導して、ある意味おせっかい的に展開している状況です。また、アーカイブ化した資料の活用方法についても、まだ整理できていません。地域学習などに接続させていく構想はあるものの、具体化には至っていないのが現状です。

庄司　なるほど。でも、地域の中ではなかなか生まれにくい、調達もしづらい技術を外からスッと入れることで、NTT東日本さんがインパクトを与えている感じですよね。しかも、一時的な広がりじゃなくて、時間軸の長さ——次世代につなぐという“縦の視点”を重視しているところが面白いと思います。谷口さんはいかがですか？

谷口　私は、縦というより横の広がりを意識しています。PoliPoliGovを通じて、若者と地域の接点をつくり、そのきっかけから地域を好きになってもらう。そんな流れを横展開していきたいと思っています。ただ人を巻き込むだけではなく、その活動が本当に地域住民のものになっているのか、そして住民の皆さんに良い影響を与えられているのかということを、常に考えています。

庄司　なるほど。地域の皆さんと関わっていく時に、心掛けていることはありますか？

谷口　とにかく「話を聴く」ということですね。あまりかしこまった感じではなく、立ち話のように自然な雰囲気で伺うことを心掛けています。

庄司　インタビューというよりは、飲み会みたいな感じでしょうか？

谷口　そうですね。ものによってですが。一緒にキャンプファイヤーしたりもしました。

庄司　阿部さんはいかがですか？

阿部　実は、ワークショップという形での交流はあるのですが、十分な対話はできていないと感じています。地域との窓口は博物館の学芸員の方が担ってくれていて、その方は協力的なのですが、そこから地域に浸透するには時間がかかりそうだなと…。テーマも専門的なので、広く浅くというよりは特定の人の偏愛をくすぐるような「関わりしろ」を増やせればと思って取り組んでいます。

庄司　なるほど。どちらかというと専門性の高いところに深く刺さって、そこで根を張って、それを長く続ける——そんな感じですよね。一方、谷口さんは、いろんなところに深く、広く入っていくタイプ。広く種をまいて、そして「これは長期的に芽が出ます」というイメージなのかなと思います。高山さんは、地域エバの活動を通じて感じるところはありますか？

高山　そうですね。私自身、地域エバの素晴らしい活動を、社内で「興味はあるけどまだ参加できていない」という社員にもぜひ知ってほしいと思っています。社内外に発信することで、“共感の輪”が広がったらいいな、という気持ちで情報発信しています。昔ながらのボランティアベースのCSR活動って、社員の価値観が多様化してきたこともあって、運営が難しくなってきていると思うんですよね。企業としては、事業性のある領域で社会貢献活動を進める方向にシフトしている。それ自体はうまくいくんですが、じゃあ事業性がないエリアではどう活動したらいいのか、という課題が残るわけです。そこで、社員の自主性や興味、関心、楽しみといったものから始まる地域貢献活動を、会社が公的に応援することで、事業性のないエリアでの活動もサポートできないかと考えています。目的意識が曖昧なまま、共感が薄く、社員のモチベーションが上がらない状態で活動をすることも避けられますし。今は単なる応援にとどまらず、地域エバの方々のウェルビーイングやエンゲージメントを、調査・研究の面から深掘りする取り組みも始めています。

庄司　おっしゃる通りで、CSV（Creating Shared Value）として価値を業務につなげていけたら良いと思いますし、地域エバの方々の満足度というものが、重要な指標になるかもしれませんね。地域エバの方々がたくさんいる企業なら、引き出しが多く、アイデアが溜まったプールから事業性のあるものもどんどん生まれてきそうです。

今日3人の話を伺って、それぞれ考え方や捉え方が異なっているところが面白いと感じますし、視点の異なる人たちが集まっている時点で、それはもう“面”になりつつあるんじゃないかと強く感じました。ミライ研の取り組みは、まだ始まって間もないですが、企業内の仕組みとしては手応えが見えてきている気がします。いろいろな取り組みを積み重ねて、その中から複数のモデルが生まれると、この取り組みもさらに加速するんじゃないでしょうか。ぜひ今後も試行錯誤を一緒に続けていきましょう。

本日はどうもありがとうございました。

PROFILE

ファシリテーター

武蔵大学社会学部 メディア社会学科 教授／
武蔵学園データサイエンス研究所 副所長

庄司 昌彦氏

国際大学GLOCOM主幹研究員、東京大学空間情報科学研究センター客員教授。専門は情報社会学・情報通信政策で、特にデジタルガバメント、地域情報化など。デジタル庁オープンデータ伝道師、総務省地域情報化アドバイザー、社会情報学会副会長なども務める。著書は『RE-END 死から問うテクノロジーと社会』（塚田有那・高橋ミレイ／HITE-Media 編著・BNN・2021年 ※人工知能学会AI-ELSI賞受賞）など多数。